

1 研究主題

豊かな関わりの中で、主体的に学び続ける子どもの育成 ～対話を通して思考を深める指導の工夫（3年次）～

2 研究主題設定の理由

本校では、平成30年度から2か年にわたり、研究主題を「豊かな関わりの中で、主体的に学び続ける子どもの育成～対話を通して思考を深める指導の工夫～」としてきた。平成30年度は、安心して学べる環境づくりや、分かる授業づくりの基盤の上に、全ての教科における「対話」に着目した研究を、平成31年度は、前年度の「基本的な複式指導の進め方」や「思考する子どもの姿」を基に、「対話的な活動」をどう授業に位置付けていくかということについての研究を行ってきた。これらの研究から、次のような成果があった。

- 思考を視覚化することで、自力解決（一人学び）の力や説明する力が向上した。また、互いの違いを比べて考える、よさを知る場面も増えてきた。
- フォロワーとしての返事や、間接学習時に先生を呼ばない等、リーダーだけでなく、みんなで学習を進めて行くという意識が見られるようになった。
- 共通実践する事柄を決めて取り組むことで、子どもたちが見通しをもって安心して学習を進めていくことにつながっていた。
- 「単元カード」や「リーダーカード」等の様々な教具を用いて、対話を促す実践が広がり、共有することができた。

しかし、一方で、以下のような課題も見られた。

- 対話が自分の考えを見直し、思考を深めるところにまで至っていない。
- 子どもたちが、「自ら学ぶ、かかわりの中で学ぶ」ことのよさ・意義を感じる場所にまで至っていない。

これらのことから、今後はさらに、子どもたちが、自分なりの問いや願いをもったり、自他の特性を認め合いながら関わり合って学んだりすることのできるようにしていく必要がある。

以上のことから、今年度も引き続き、研究主題を「豊かな関わりの中で主体的に学ぶ子どもの育成」、副主題を「対話を通して思考を深める指導の工夫」と設定し、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業の在り方を探っていく。

3 研究の視点

本副主題3年目となる今年度は、前年度までの研究の内容を生かし、次の2つを研究の視点とする。有効だった手立てについては、共有化を図り更に、児童の深い学びにつなげていきたい。

(1) 複式授業において子どもたちが安心して学ぶためのスタイルづくりと取組について

本校では、これからも複式学級が続くため、担任が変わっても子どもたちがある程度の学習スタイル

ルを身に付けていることは、子どもたちが安心して学習を進め、これからの学びが円滑に行われるという意味で大切となるだろう。ある程度のパターンをつくり、繰り返し指導を続けること、共通実践を重ねて検討していくことは、子どもの力をスパイラルに育てていくために不可欠である。だれが担任となっても、子どもたちに同じように力を付けることができる指導の在り方が求められているのである。

そこで、今年度は、次のようなことを共通実践し、検討することを繰り返したい。

- 学習の見通しがもてるものの提示（リーダーカード等）
- 算数科の導入パターン（問題に線を引くこと・共通点や相違点を見つけること）
- 一人学びの時の思考ツール使用のパターン
 - ・ 比較「複数の事象の相違点や共通点を見つけ出す。」・・・ベン図
 - ・ 分類「視点を見つけ出す。」・・・チャート図、K J法
 - ・ 関連付け「既習事項や経験と結びつける」・・・コンセプトマップ
 - ・ 構造化「事実一分かったこと一主張の筋道を立てる」・・・なぜなにシート
ピラミッドチャート
 - ・ 評価「事物のプラスとマイナス面を指摘し、自分の意見を述べる」・・・PMチャート
- 共学びの時のリーダーの声かけパターンと質問パターン
 - ☆「萩市複式サポートブック」や他校の取組を参考にする。

(2) 豊かな対話を生み出す授業デザインについて

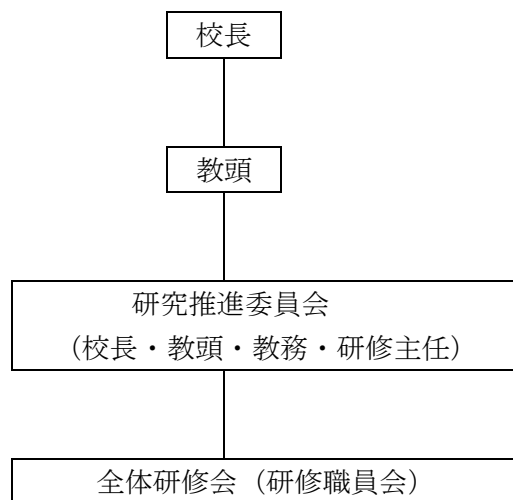
子どもたちは、自分たちで学習を進めることには慣れてきているものの、「どうのことだろう?」「知りたい。」「話し合って解決したい。」というように、自分なりの問いや願いをもったり、自他の特性を認め合いながら関わり合って学んだりする姿があまり見られなかった。子どもたち同士の対話を通じた学びを充実したものにするためには、課題・発問の精選や教師の支援が重要である。そこで、研究授業を通して、以下の点について考えたい。

- 課題・発問の精選
 - ・ 子どもたちの問題意識を喚起し、考えたくなる、または考えやすい発問・課題であるか。
「なぜ」「どのように」といった発問は答えにくいと感じる子どもが多い。
「どれが」「なにが」など、答えやすい発問や課題にすると、全員が参加しやすくなる。その上で、根拠や理由を問う方が、対話が深まりやすいであろう。
 - ・ ねらいが焦点化され、ゴールが明確であるか。
- 間接指導時の教師の支援
 - ・ 子どもたちの何を見取るのか、そのために、どんな手立てを打っておくのか。
 - ・ 子どもの考えを揺さぶるような補助発問や資料の用意。

4 研究の方法

- ① 研究授業の実施
 - ・全ての学級における授業研究会。提案を受けた互見授業。講師招聘による研究会
- ② 研究授業以外の互見授業の実施
- ③ 学習内容・学び方の定着、活用のための各教科・領域との関連づけ
(言語・論理的な思考)
- ④ 個別の補充学習
- ⑤ 校外研修、他校の授業研究会への参加（資料、復伝）
- ⑥ 児童の実態把握
 - ・全国学力検査・確認問題による児童の学力の把握と指導法の改善
 - ・データ・映像・準備物・子どもの学習記録など、記録を保存していく
- ⑦ その他
 - ・トライノート
 - ・読書活動の推進
 - ・基本的な生活習慣の見直し

5 研究の組織



組織名	活動の内容
研究推進委員会	研究推進の企画および連絡調整にあたり、推進状況や問題点を確認しながら課題研究の深化・充実を図る。
全体研修会	全教職員が課題内容について協議し、全体および部会研究について共通理解を図り、全体研修を進める。掲示物や共通のカード・教具などの製作も行う。

6 研修計画

	内 容
5 / 1 3	○第1回研修職員会議 <ul style="list-style-type: none"> ・本年度の研修について検討 ・指導案の形式について ・全国学力調査・確認問題結果分析について
6 / 3	○第2回研修職員会議 <ul style="list-style-type: none"> ・共通実践の確認・共有
6 / 1 0	○第3回研修職員会議 <ul style="list-style-type: none"> ・第1回校内授業研究会 授業者 5・6年 科
7 / 2 2	○第4回研修職員会議 <ul style="list-style-type: none"> ・1学期のふり返り（成果と課題、共通重点取組の確認） ・全校で共通して行う実践の確認 ・全国学力調査・確認問題結果分析
9 / 2 3	○第5回研修職員会議 <ul style="list-style-type: none"> ・研修会復伝 ・指導案検討 3・4年 科
1 0 / 1 4	○第6回研修職員会議 <ul style="list-style-type: none"> ・第2回校内授業研究会 授業者 3・4年 科
1 0 / 2 8	○第7回研修職員会議 <ul style="list-style-type: none"> ・指導案検討 1・2年 科
1 1 / 2 5	○第8回研修職員会議 <ul style="list-style-type: none"> ・第3回校内授業研究会 授業者 1・2年 科
1 / 2 7	○第9回研修職員会議 <ul style="list-style-type: none"> ・研究の振り返りと次年度の課題について
2 / 3	○第10回研修職員会議 <ul style="list-style-type: none"> ・研究のまとめの作成